



Title	太田原高昭著, 『北海道農業の思想像』, 北大図書刊行会, 1992年, 257頁
Author(s)	千葉, 燎郎
Citation	北海道農業経済研究, 2(2), 60-61
Issue Date	1993-03-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/62893
Type	article
File Information	KJ00009064869.pdf



[Instructions for use](#)

けての「悪戦苦斗の取り組み」が数多く行なわれてきたが、本書は情報と環境調整という新たな概念を切り口にして、この課題に新しく挑戦したものといえることができる。その意味で私はまず著者の意欲的な挑戦に対して高く評価したいと思う。

その上で、事例研究を一步進めて、方法論を準備した上で理論化を目指す著者に望みたいことは、吉田民人の情報論に対する著者の考え方をいま少しく詳細に、誰にでも分かるように説明してほしいということである。著者は記号変革論に「違和感」を抱き、もう少し検討しなければならないことを説き、実践者の立場からの記号変換論であるべきことを求めているが、この点いま少しく積極的に著者自身の見解を披瀝して欲しかったというのが評者の感想である。もし「配慮すべき点はいくつかある」とすれば、全部それを出し尽して欲しかったと考える。

さらに欲をいえば、不確実な環境のもとにおける情報プロセスの失敗例を挙げてほしかったと思う。本書第II部に掲げられた各地にの事例は比較的順調に軌道を歩んだものがほとんどだが、これと対照的事例を掲げれば、情報プロセスの意義がもっと鮮明に現れたかもしれないからである。もちろん失敗事例の研究はその対象を選ぶことすら容易でないことが分るが、別海、中標津など根室地方の調査も行なわれていることであるから（第II部第2、第4章）、少しくアンを延せば新酪農村におけるスチール・サイロの建設とその利用実態に迫り得たはずである。新酪農村のスチール・サイロは営農設計の中にその建設が義務づけられ、融資条件にもなっていたはずであり、個人の選択が許されるようなものではなかった。それであれば、計画した側はスチール・サイロに関する萬全の情報を持ち合わせると同時に逐一酪農家にその情報を流すべきであった。さもないと実施主体は「危険を負担せざる企業者」となるからである。

他方生産側についていえば、多額の投資を伴な

うだけに、スチール・サイロの導入に関しては細心の注意をはらって十分な情報を収集し、現地の環境条件に合致するよう現場情報をつくり上げて、その利用に習熟することが必要であったと思われるが、実際にそれがどう行なわれたか、情報研究の立場から詳細な分析がほしかった。もしそれがあると、情報と環境調整プロセスに関して、「光と影」のうちの影の部分が明らかになるし、情報のもつ意義がもっと浮彫りにされるであろうと考えるからである。しかしこれは望蜀の評かもしれない。（著者は帯広畜産大学）

太田原高昭著『北海道農業の思想像』

北大図書刊行会 1992年 257頁

北海道地域農業研究所 千葉燎郎

ユニークな書名である。「北海道農民の思想像」ではなしに、「農業の思想像」とある。今日にいたる北海道農業を形づくってきた幾多の人びと、げんにそれを担う人びとを支えるものの見方・考え方、それも抽象的なものではなしに、具体的な実践活動にあらわされたものをとらえてみようというのが、著者の意図であろう。「あとがき」の末尾（256頁）で、著者はいう。「北海道の大地に刻み込まれた多くの農業者の思いや、その心を心として研究に打ち込んだ学者の精神を表現するのに（このタイトルが）適切だと思われたからである」と。

まず、目次を掲げよう。

I 農民運動の形成と展開

- 1 農民運動の黎明
- 2 農民同盟と農協組織
- 3 農民運動の栄光と残照

II 地域農業の精神風土

- 4 農村政治の底流を探る

- 5 農業近代化と十勝農民
- 6 複合経営と「ともづれ」の思想
- 7 上川の風土と農業
- 7 北海道農業と農学
- 8 北海道稲作と農学研究
- 9 農業経済学の形成
—高岡熊雄と川村琢

本書は、著者が1971年から1987年までの間に、さまざまな機会をえて発表した上記9編の文章から成っている。「第I章は、戦前の農民運動の形成期を扱った論文と、戦後の農民同盟を中心とした農民運動と農協組織の関連を取り上げた論文、および農民主体の歴史的成長過程を通史的に解説したものの3編からなる。第II章では、構造政策から減反政策に至るきびしい情勢に各地の農民がどのように対応してきたかを、地域農業の精神風土の違いに関心を払いながら検討したものを4編収録した。第7章では、このような農民の主体的努力を、北海道における農学研究がどのように取り上げ、またそれにどのように影響されてきたかを、自然科学と社会科学の両面から考察している」（はしがき）。

著者もいうように、これまでの農業問題に関する研究は、農業生産・流通の構造分析や農民層分解の形態把握などのような、客観的な解析がその主流であって、農業者あるいは農学者の主体的行動に焦点をあてた、主体性の究明については、これを『不在地主』（小林多喜二）や『火山灰地』（久保栄）などのような文学作品に譲って、社会科学の接近を試みたものはきわめて乏しい。著者は、このような従来の農業問題研究の欠落を埋めるための礎石として、本書をまとめた旨を述べている。

このことは、きわめて重要な指摘である。ことに、今日わが国農業が死活の危機に直面しており、これが打開を第一義的な課題としつつあるとき、

これにあたる農民主体をはじめとする主体的条件の究明を図ることは、農業問題研究の当面する核心的なテーマであるといわなければならない。著者も、「はしがき」の冒頭でその点に触れているが、評者自身が、北海道農業の危機の現況と、これをめぐる主体的条件の究明を試みた論稿として、「わが国農産物市場をめぐる基本矛盾—輸入“自由化”攻勢下の北海道農民を中心に—」（井野隆一・重富健一・千葉療郎共編『農産物市場問題の現段階』、梓出版、近刊にも再録）を発表している。一読のうえ、批判的検討を加えていただけると幸いである。

本書に収められている9編の文章は、一部を除いて学術雑誌や専門研究書に発表されたものではないだけに、叙述は平明で、いずれも読み易い。達意の文章が、著者一流の世界に読者をひき入れてゆくであろう。ことに第II章「地域農業の精神風土」は、北海道農業の歴史的開発過程の各段階と、各地の地理的特性とが絡んで、地域農業にそれぞれ独自の精神的風土を付与していることを指摘して、きわめて興味深い。そして、本書が全体として「北海道農業の精神風土」を示すものになっているであろう。

ややいかめしい本書の書名にとらわれることなく、多くの読者にぜひ一読を奨めたい。とくに、これから北海道農業を学ぼうとする人びとには、北海道農業の歴史的特性、地域的特性を頭に入れるうえで、大変役に立つ好著であるといっている。

なお、著者には、本書を土台として、北海道農業の主体性研究を本格的に展開されるよう、つよく希望してやまない。（著者は北海道大学）